



「昆虫こわい」丸山宗利（著）.
263 pp.新書版・オールカラー. 幻冬舎.

虫の本はふつう売れないのである。ある大手出版社の編集者Aさんが「虫の本はあまり売れないのよ」と、私の持参した企画をやんわり退けたことがあった。その企画はとて有名な著者のものだから、これはどうも本当のことらしい。実際に別の版元から陽の目を見た件の虫の本は、やはりたいして売れなかったのである。それでも表題の著者の本は売れているらしい。2014年に光文社から出た「昆虫はすごい」は、13万部超のベストセラーであるという。

その丸山宗利さんと一緒に、今年の初めにフレンチギアナに採集に行く機会があった。同地で採集経験のある彼が、宿泊先や航空便の手配ばかりでなく、仔細な現地情報を事前に教えてくれたから、南米初体験の私でも安心して採集旅行を楽しむことができた。最大の目的だったタイタンオオウスバカミキリも、同行のカミキリ屋2人とともに1頭ずつだが手中に収めたのである。

それにしても、アマゾン熱帯雨林の昆虫の多様性はすばらしかった。灯火採集では、それこそあらゆる分類群の昆虫が飛来した。とくに蛾と半翅類の仲間が多く、昼行性の蝶でさえ少なからず飛んでくる。そのように連夜にわたり賑やかな宴が続いたが、唯一の不満

があるならば、私が専門とするカミキリムシが非常に少ないことであった。それは事前に聞いて覚悟していたが、そもそもこの季節は甲虫の仲間が少なく、タイタン以外に目ぼしいカミキリは採れないらしい。

丸山さんは毎日の夕食後に私たちのロッジを訪ねてきて、小さな殺虫管を渡してくださるのであった。灯火採集に来たツノゼミを採っておいでくれという。彼はハネカクシを始め好犠性昆虫の専門家だが、最近ではツノゼミにも凝っているそう。しかし甲虫と違い、この時期は半翅類のツノゼミが非常に多く、一晩で100種くらい採るのである。カミキリが減多に来ないこともあり、手持無沙汰の私たちは、請われるままに連夜ツノゼミを集めてはそれを翌朝に召し上げられる。ふと気づけば、半ば丸山さんの採り子となっていた。

本書の表題のように、私には昆虫はこわくないが、いっぽう丸山宗利おそるべしである。もっとも「昆虫こわい」は古典落語の「饅頭こわい」をもじったもので、翻意は昆虫大好きということらしい。本書は、南米やアフリカ、熱帯アジアなどで著者が体験した採集調査の様子が興味深く綴られている。読み進めていくと、私には真っ先にあのアマゾン熱帯雨林の夜が思い出された。虫採りは目的の虫が採ればよし、採れなくても愉快的思い出だけは残るものだ。そんなワクワク感が居ながらにして味わえる本書は、虫屋であれば誰が読んでも楽しめる名著だと思う。

(新里達也)

